特別支援教育の扉 №１８１　　令和８年４月９日発行

「元気いっぱい・笑顔いっぱい」

特別支援教育統括コーディネーター　加賀谷　勝

「合理的配慮を学級の当たり前にしよう」

今年度、難聴学級が新設となる能代南中学校と弱視学級が新設となる第四小学校では、入学式を前に、聴覚支援学校と視覚支援学校の先生を講師に迎え、職員研修会を開催しました。私が参加した第四小学校の研修会の内容を紹介します。

１　合理的配慮とは

・困り感のある人が困り感のない人と同じスタートラインに立つために必要な配慮である。
・子どもの力や可能性を最大限伸ばすための配慮である。
・本人や保護者の声に耳を傾け、代替措置も含め、合意形成を図った上で提供される。
・将来その子どもの自立につながる配慮であり、行き過ぎた配慮にならないように、不必要な配慮をしていないか評価・改善を図りながら、減らしたり、変えたりする。

２　弱視学級入級児童の実態と配慮　※№174も参照

（１）困り感

・色の見分けがつきにくいものを読み取ることが難しい、遠くの文字や高い場所にあるものが見えにくい、手元の小さな文字が見えにくい、平仮名練習帳等の線が見えづらい。

（２）配慮

・文字、形、線を縁取りして境界や輪郭をはっきりさせる。注意してほしい情報を強調して色分けする。掲示物は見えやすい場所に貼る。
・文字を大きくしたり、濃くしたりする（１、２年生までは拡大教科書を使用する）。
・社会に出ると常に拡大された読み物はないので、視覚補助具（単眼鏡、ルーペ等）を使いこなして全体の学習スピードについていけるようにする。

３　演習「周囲の理解を深めるためにはどうしたらよいか」

弱視学級児童が黒板に近付いて文字を見たり、単眼鏡を使用して文字を書いたりするためには、他の児童の理解が必須になる。そこで、学年団に分かれ、「学年の子どもたちに弱視学級児童の特性をどのように伝えるか」をテーマに意見交換を行った。

→　一人一人の顔が違うように、得意なこと、苦手なこと、好きなこと、困っていることもみんな違う。足の不自由な人には車椅子、耳の不自由な人には補聴器が必要なように、見えづらい人にはメガネや単眼鏡が必要であることを伝える。

弱視学級児童の見えにくさを具体的に伝えるとともに、できないことよりも、こんな工夫をするとみんなと一緒に学ぶことができるなど、特性をポジティブに説明する。

子どもの発達段階や生活年齢によって伝え方は異なります。アイマスク体験や絵本・動画等で説明するとより理解が深まります。合理的配慮が学級の当たり前として許容される雰囲気が醸成されるように、「先生はいつでも誰でも困ったときに助ける。みんなも困っている友達がいれば助け合おう」というメッセージを送り続けましょう。能代南中学校は、発達障害に関する研修会も実施しています。一人の子どもを疎かにするとき、教育の光は失われます。一人の子どものために、新学期準備の忙しい時期に研修会を計画した両校に感謝しています。研修内容は、他の子どもの指導にも役立ちます。

とれたて直送便

「言葉のキャッチボールをしていますか？」

叱る、ほめることは、何か変化が起きたときにする関わりであるが、何気なしの言葉のキャッチボールは、無変化状態での関わり（家族の会話）である。日ごろから授業以外で子どもに話し掛けたり、子どもの話をよく聞いたりすることで互いの心の距離が縮まる。言葉のキャッチボールは、「あなたを大切に思っているよ」という隠れたメッセージでもある。